

「真田幸村の新たな男子発見か！真田幸晴伝説をさぐる」

2016年2月 櫛浜（くしがはま）郷土史研究会

山口県周南市のJR山陽本線・岩徳線櫛ヶ浜駅の東側の丘に洞庭山原江寺がある。眼下には櫛ヶ浜地区、徳山下松港の向こうには瀬戸内の島々、左手には太華山が見渡せる眺望地となっている。この境内に慶長二十（1615）年大坂夏の陣で討死にした真田幸村（信繁）の男子、幸晴夫婦と言われる墓石、台座に六文銭を刻んだ地蔵と後裔河村幸雄が建立した石碑がある。

碑文表には「幸村幸晴君夫婦之墳」、裏には「幸晴君俗称理右衛門尉幸村君之末男也、寛文六（1666）年十月廿六日病歿干 栗屋村妻君者同村農茂八之女、延宝九（1681）年正月十日歿焉 今茲明 明治三十二年十一月九世之孫、従六位勲六等、河村幸雄建立」と刻まれている。この碑の存在が「真田幸晴」伝説の始まりである。

櫛ヶ浜郷土史研究会（会長 村井洋一、事務局 周南市櫛ヶ浜公民館）では、40年に渡りこの伝説の解明に取り組んできたが、この1月に新たな資料が発見され真実性が高まってきたので紹介する。

まず、この碑の建立者「河村幸雄」なる人物は何者か。従六位勲六等叙勲を手掛かりに、内閣府賞勲局の協力を得て、その人物は判事と判明した。しかし、当時の司法省の記録は不明で、一旦調査は暗礁に乗り上げたものの運よく、旧徳山藩士に辿り着いた。そこで、徳山毛利藩の河村家譜録を調査すると本家筋となる「吉村理右衛門譜録（寛政3（1791）年）」（徳山毛利家文庫、山口県文書館所蔵）に幸晴の記述があった。（原文は別紙）

祖父吉村左太郎後改理右衛門幸晴について

要約すると、大坂夏の陣で父幸村と兄大助を失った幸村の遺児3歳の左太郎は、かねてから密約していた豊前小倉城主細川家を頼って、乳母と家臣大熊久助に抱えられ、慶長20年旧暦の4月24日に大坂を出帆したが、5月4日、周南市馬島沖で大風にあい遭難し、家来の死や盗賊の災難に会いながらも、平野浦に暫く落ち着く。その後、下小倉（場所不明）に寄った際、城主からの召し抱えの誘いを断り、栗屋村農民河村某を娶り、干潟20haを開作し永住した。との内容である。

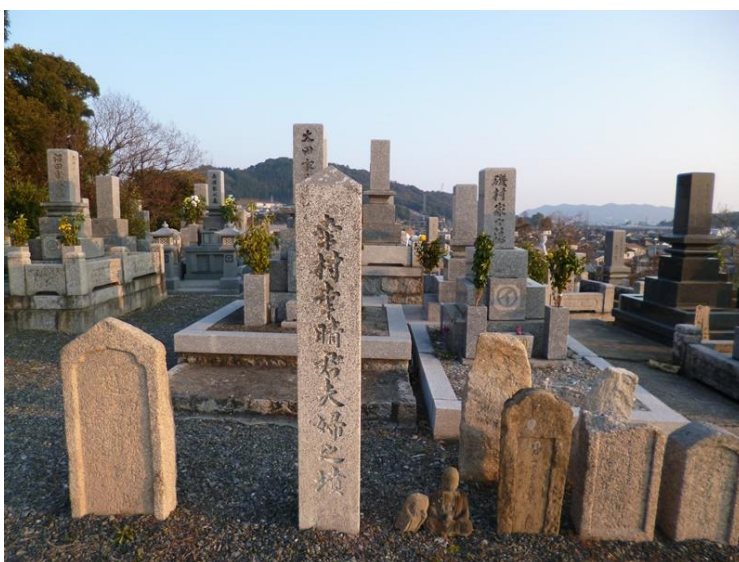
徳山毛利藩には、真田幸村の子孫に繋がる家系は吉村家以外にも、河村姓数家が存在し、廃藩置県まで続いていた。

また、櫛ヶ浜地区に隣接する栗屋地区には「共に逃れてきた者に刀鍛冶があり栗屋の吉祥院下で鍛冶屋を営んだ。幸晴も長じて農具等の鍛冶屋を営む。ただし追手を避け、真田を名乗らず河村幸晴と称した。ちょうど毛利氏の農地開発食糧増産奨励のときであり、農具の生産修理は繁盛を極めた。依って河村（真

田) 幸晴居宅辺は小字鍛冶屋河内と呼ばれるようになり近くの川は鍛冶屋川と呼ばれるようになった。」との伝承や原江寺近くには六文銭紋の付いた兜甲冑と軍配を継承している家系もあり、今後、幸晴との関係を検証していく必要がある。

冒頭の河村幸雄の補足であるが、慶応元年（1865）9月9日付けの徳山藩有志血盟書に河村靖之進幸虎（幸雄）の血判があることから、四境戦争・戊辰戦争等討幕に長州藩士として参戦した可能性が高く、250年の時を経て、先祖幸村の徳川への仇を返したことになる。その後は、福岡、八戸等全国の裁判所判事を歴任すると共に、「明治法規大全」、「日本刑法講義録」等著書も執筆した。

NHK大河ドラマ「真田丸」が始まったこの年に、この伝説の信ぴょう性を高める資料が発見できたことに、運命の糸を感じるが、調査研究は始まったばかりである。



後裔河村幸雄が建立した石碑と幸晴夫婦と言われる墓石



台座に六文銭を刻んだ地藏（俗名 吉村源太郎）